ミンガラバー こんにちは

認定 NPO法人
日本・ミャンマー
医療人育成支援協会
〒700-0815
岡山市北区野田屋町2-4-18
TEL：086-224-0102
FAX：086-221-2554
URL：http://www.mjcp.or.jp

「救急医療のパイオニアに」

ヤンゴン医大に初の講座
女医2人、岡山大で研修

ミャンマーで初めての救急医2人が、3カ月にわたり岡山大学救急医学講座（氏家良人教授）で研修を受けた。協会の働きかけに応じて岡山県医師会が旅費と滞在費を負担した。

今春、ヤンゴン医科大学（1）に同国初の救急医学講座が発足し、麻酔科出身の女医のカインシュエワーさん（44）とタンダウィンヌェさん（44）が救急医になった。2人はすぐに来日し、7月上旬まで岡山大で研修。エコー（超音波）やコンピュータによる画像診断を学んだり、救急車で患者搬送なども体験した。

氏家教授（左）の説明を聞く女医2人（右）＝岡山大病院

指導に当たった協会員の氏家教授は日本集中治療医学会理事長をつとめる。ミャンマーへも救急医療の調査に出かけている。

同教授によると、救急医療体制とは①病院などの診療体制②患者の搬送③情報システムの3要件だが、ミャンマーには②と③がない。①についても、例えば骨折には整形外科、頭部強打は脳外科というように個別に対応するのが実情。全身損傷のような事故に対応できる救急救命医はこれまでいなかった。経済発展に伴い、交通事故や作業事故など急増する中、救急医療体制作りが求められている。

研修を終えた2人の医師は「ミャンマー救急医療のパイオニアになります」と決意を述べて帰国した。

意義ある事業 積極的に

総会 今年度予算決まる

年に1回開く協会の総会が7月27日夕、岡山市中区の岡山プラザホテルであり、会員約50人が出席した＝写真。2013年年度（13年7月―14年6月）の事業報告と活動計算書、2014年度（14年7月―15年6月）の事業計画と収支予算がいずれも承認された。

事業費が13年度は744万円だったのに対し、14年度予算は390万円と大幅に減る。岡田茂理事長は「前年度はこれまでにない多彩な活動をしたため、予想以上に費用がふくらんだ。新年度はある程度活動を抑えざるをえないが、意義のある事業は積極的に実施したい」と説明した。

向こう1年間に計画している主な事業は、ミャンマーでの医学総会やシンポジウムへの参加、手術の指導などを引き続き行う。医療人を招いての研修は救急医療と画像診断に関わる人材を重点的に育成する。このほか岡山、千葉、新潟、金沢、長崎、熊本の6大学が共同で進める予定のミャンマー医療人材育成支援に参画する。

英文略称は「MJCP」

定款の一部も改正され、協会の英語名（Myanmar-Japan Collaboration Project for Fostering Medical Humana Resources）から頭文字をとって英文略称を「MJCP」とすることが決まった。

総会後、懇親会が開かれ、会員間の交流を深めた。マンドリン演奏者伊丹典子さんの演奏があり、井上陽水「少年時代」、ホルスト「木星」など6曲を披露。アンコールにこたえて『ビルマの竪琴』にちなむ「埴生の宿」「仰げば尊し」も演奏され、会場を盛り上げた。

ミャンマーに岡山大国際同窓会支部

留学・研修107人で発足

ミャンマーから岡山大学へ留学したり、研修にやって来たりした107人が「岡山大学国際同窓会ミャンマー支部」を結成した。8月19日、ヤンゴンであった発会式には岡山大の森田潔学長と張紅法学部教授・国際同窓会長、協会の岡田茂理事長が出席した。

岡田理事長と一緒に記念撮影。懇談会ではあちこちでこんな風景が＝ヤンゴン

メンバーの大半は医学部で学び、そのほとんどは協会が招いたり、協会の呼びかけによる自治体や団体などの支援でやってきたりした。今はヤンゴン医科大学（1）、同（2）やマンダレー医科大学の教授になっている人もいるし、将来のリーダーとして期待されている若手の研究者も多い。

発会式には日本大使館の関係者も出席。森田学長が世界各地に岡山大学国際同窓会支部ができていることを説明し、「その中でもミャンマーは最大規模です」と挨拶した。同窓会の支部長にはミョーキン元ミャンマー国立医学研究局長が就任した。

式の後、懇親会では岡山滞在の頃の話が弾み、特に岡田理事長の周りには大勢の人の輪ができた。

放置自転車 診療の足に

自転車はトラックに積み込まれて神戸港へ＝岡山市内

岡山市内に放置され、引き取り手のない自転車100台が、ミャンマーで「医療の足」として再利用されている。

協会の呼びかけに応じて、協会員らがミャンマーに寄付した診療所はこれまでに11ヵ所。ヤンゴンの郊外などにあり、周辺は交通インフラがまだ整備されていないところが多い。このため、診療所の看護師や助産師らは歩いて訪問看護に出かけたり、妊婦を訪ねたりしていた。

「自転車があれば便利」と協会の永山久夫理事が岡山市に打診し、市は「国際貢献になる」と提供を快諾。5月26日、市役所で大森雅夫市長から協会への贈呈式があった。

放置自転車といっても、どれも状態がいいものばかり。神戸港までは中谷興運（倉敷市、中谷庄吾社長）が無料で輸送。ミャンマーへは協会が船便で送った。8月20日、ヤンゴンで贈呈式があり、各診療所の責任者に引き渡された。

技術が大変向上しました

エイエイモウ医師

倉敷芸術科学大学の先生たちは、私たちを温かく迎え、支援の気持ちにあふれていました。研修は子宮頸がんの細胞診。毎日、電車とバスで通いました。ここは細胞診研修ではとても有名なところ。私はミャンマーでは教育病院で働いており、毎日多くの子宮頸がん細胞診を見ますので、ここで研修ができることに感謝しました。

子宮頸がんはミャンマーではとても多く、女性では2番目に多いがんです。ここで研修を積めば、初期のがんを多く見つけ、多くの命を救うことができます。細胞診に習熟すれば体液からも悪性細胞を見つけることができ、転移がんの診断にも役立ちます。

診断を正しくするには染色も美しくなければならない。先生たちはその技術を教えてくださり、質問にもきちんと答えて頂きました。

多くの日本の友達に出会いました。皆さん、細胞検査技師を目指し、熱心に勉強しています。私たちは一般的な診断方法、例えば、免疫組織学やPCRを使った遺伝子解析もみることができました。これらに使う機器は高性能なので臨床診断には非常に有用な手段です。

倉敷芸科大では細胞診断を系統的に学び、特に大野英治教授からは子宮頸部と体部のがんを徹底的に教えられ、坂口卓也教授にも大変お世話になりました。

その後は病院実習として岡山協立病院へ。私は病院病理にも興味があり、綺麗なスライドの作り方から日常の検査までのあらゆることを学び、臓器のカッティングから診断決定までの流れも知ることができました。細胞診の難しい例は豊田博先生が、組織診は大森昌子先生が教えて下さり、技師さんも必要な時はいつも傍にいてくれました。

僅か10週間の研修期間でしたが、診断決定の技術は大変向上したと感じました。協会が今後とも医師や医療スタッフに治療技術や診断技術の支援を続けて下されば、ミャンマーの医療に多くの貢献ができます。

好きな日本 美しい国でした

ココトン医師

ミャンマーの中堅、若手の医師４人が、岡山県内での70日間にわたる「子宮がん検診のための細胞診研修」を終えて、６月下旬に帰国した。協会へのお礼、研修先の倉敷芸術科学大学と岡山協立病院、岡山大学病院病理部（柳井広之教授）への感謝などを綴った文章を残して・・・。その中から、２人の研修・印象記を紹介する。

細胞診研修を終えて

研修の合間、談笑のひととき。左端がココトン医師、右端エイエイモウ医師＝倉敷芸術科学大

私はマンダレー医科大学の病理医で、国際関係の担当でもあります。

日本は私がこれまで訪問した国で最も美しい国でした。日本の意味は「日の本」であり、しばしば「太陽の昇る国」と比喩されていることは知っていました。ミャンマーは「パゴダの国」と呼ばれていますが、パゴダは「昇る太陽」によって更に明るく照らされます。

出発以前から、多くの理由で日本を好きになっていました。第1に、日本人は非常に頑張り屋だということ。戦争や、地震・津波、人生の多くの困難など生命が脅かされる事態に出あっても、その度に息を吹き返します。第2に、日本人の美しい心が大好きです。暖かく客人をもてなし、他人に対して感じよく、親切です。

第3に、日本人はミャンマーを助けてくれます。政府レベルから色々の団体、個人のレベルまで、現在も病院、学校を建て、健康、教育、ビジネス、政治問題など沢山のことで助けてくれています。これらのことを考えると何時も胸が高鳴り、「太陽の昇る国」の人々への賛歌で溢れるのです。

関空に到着し、バスで岡山に向かう途中の景色は忘れられないものでした。数え切れない程の橋をすぎ、最高技術のトンネルをくぐりました。

日本滞在中に、私たちは東京、福島、横浜、鎌倉、京都そして奈良を訪れました。これらの興味深い場所の息の止まるほどの光景に圧倒され、私の頭と心臓は今でも打ち続けています。

日本食で私の好きなのは寿司と魚介類。寿司はミャンマーでも一番よく知られている日本食です。私は酒は飲まないが、少しばかり日本酒、握り寿司、刺身を友達と一緒に試してみました。また、カレーライスやチャーハンも食べました。岡山で経験した肉料理は焼き鳥、トンカツ、肉じゃが。味噌汁は研修中には毎日飲みました。天ぷらとつまみはミャンマーに帰っても食べたくなるでしょう。

私たちは協会にとても感謝しています。心優しい日本の人たちはこの協会に寄付をしており、その支援がなければ、私たちの研修はできなかったでしょう。とくに、理事の西山央子さんには特別の感謝を捧げたい。宿舎の提供ばかりではなく、美味しい食事をしばしば作ってくださいました。

協会だより

岡山大病院 視察

マンダレー医大学長

マンダレー医科大学のティンマウンハン学長が6月下旬に来日。岡山大学で医学教育カリキュラムの説明を聞いたり、病院の最新施設を見学したりした。

シンポで発表

ミャンマー医師5人

岡山県医師会招く

6月下旬、ミャンマー医師会の5人が協会と岡山県医師会の招きで訪れ、岡山大学病院や老健施設でがん治療や老人医療の視察をした。岡山大では老人医療についてのシンポジウムがあり、5人もミャンマーの事情について発表した。

ヤンゴンへ 経済視察

岡山商工会議所

岡山商工会議所の森健太郎国際委員長と窪津誠専務理事が5月下旬、ヤンゴンの商工会議所、証券取引所を視察した。また郊外に昨年末に出来た、協会の呼びかけによる寄付診療所「西山堅クリニック」へも出かけた。

協会から、岡田理事長と前坂匡紀理事が同行した。

ヤンゴン歯科大へ 診療いす贈る

岡山大病院

岡山大学病院の病棟新築に伴って、これまで使われていた歯科用の診療いす2台が8月、ミャンマーへ贈られた。1台はヤンゴン歯科大学で使用され、もう1台は今秋完成する協会関係の寄付クリニックに備えられる。

事務所、移転しました

駅前町から野田屋町へ

こんにちは。皆様、お元気ですか。

この夏は異常な天気が続き、とりわけ雨が多く、お困りだったでしょう。広島市内では土砂災害で大変な有様です。早い復興を念じております。

新事務所は岡山市北区野田屋町二丁目4番18号です。電話、ファックスは今までどおりです。以前の事務所からは徒歩5分で、野田屋町郵便局の北向かいにあります。

5階建てビルの2階が事務所で、4・5階がミャンマーからの研修生が滞在する宿舎になっています。

近くにお越しの折はぜひお立ち寄りください。

（理事　西山央子）

編集後記

チェコを5月下旬に旅してきました。菜の花と麦畑が果てしなく続くボヘミアの大地に身を置きたい。本場のピルスナー・ビールをぐいっとやりたい。それにもう1つ、これがいちばんの目的ですが、「プラハの春」の舞台をぜひ見ておきたかったのです▼1968年、当時は共産圏だったチェコで検閲の廃止や言論の自由が認められるようになり、それが「プラハの春」と呼ばれました。しかし、この民主化の動きは、旧ソ連軍などによって押しつぶされたのです。今はプラハ随一の繁華街になっているヴァーツラフ広場には、あの時ここで戦車による抑圧に抵抗して命を絶った青年の記念碑がありました▼以来、「春」は民主化の代名詞になり、最近は「アラブの春」、そして「ミャンマーの春」です。アラブはむしろ混乱に陥っていますが、ミャンマーの改革は順調に進んでいるように見えます。例えば1面で紹介した「ミャンマー初の救急医」の研修。こういった1つ1つの積み重ねが「春」を本物にするのです。

（西﨑）